



Title	「アスペクト盲」は何が出来ないか
Author(s)	奥, 雅博
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1989, 15, p. 21-40
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9862">https://doi.org/10.18910/9862</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「アスペクト盲」は何が出来ないか

奥 雅 博

1. 「アスペクト盲」とは何か。テキストの呈示
2. 「アスペクト盲」とは何か（続き）
3. 一つのアスペクトの下で見ることの「生理学的基準」
4. 「生理学的基準」に対するアスペクト盲人の反論
5. 「として見る」概念の家族的類似性。  
「アスペクトの交代」の位置
6. 「アスペクト」の概念のさまざまなアスペクトについて
7. 誰がアスペクト盲なのか。アスペクト盲は何が出来ないか
8. 「アスペクト盲」想定の子き詰り

## 「アスペクト盲」は何が出来ないか

### 1 「アスペクト盲」とは何か。テキストの呈示

『哲学探究』の第Ⅱ部 xi の中ほどをやや過ぎたあたり、Blackwell 版のページ付けでは 213 頁から 214 頁にかけて、「アスペクト盲」に関する短い記述がある。「アスペクト盲」はウィトゲンシュタインが想定したものであり、彼はこの概念を「アスペクトの交代」という体験が持つ意義を検討する概念分析（一般の言い方では思考実験）の道具として案出したのである。

『探究』の上述の箇所は『最終草稿Ⅰ』の 778-784 節を推敲したものである。議論の手がかりとして、ここでは『最終草稿Ⅰ』から訳出を試みてみる。<sup>2)</sup>

778. ところで、次の問が我々の心にどうしても浮かんでくる。即ち、あるものをあるものとして見ることの出来ない人間は存在可能だろうか、あるいは、ある人間にこの能力が欠けているとすればどうであろうか。どのようなことが帰結するであろうか。この欠陥は、例えば色盲の欠陥と比べるべきであろうか、それとも絶対音感の欠如と比べるべきであろうか。この欠陥を（さしあたり）「アスペクト盲」と呼ぶことにしよう——そして、このことで何が意味されうるかをよく考えてみたい。（概念の研究）

779. そうすると、彼は例えば立方体の図式を立方体として見るのが不可能ということになるのか。でも、不可能ということから、彼がそれを立方体を表わしたもの（例えば製作図）として認知できない、という帰結は生じないであろう。しかし彼は一つのアスペクトからもう一つのアスペクトに跳び移ることはないであろう。問題：彼は、我々と同じく、それを立方体とみなすことが可能であろうか。不可能なら、このことは盲目とは呼ばれないであろう。

彼の絵に対する関わり方は我々の場合とは一般に異っているであろう。（そして標準からのこの種のずれは容易に想像できるものである。）

780. 彼は二つの顔が似ていることに盲目ということになるか。しかしそうすると二つの顔が同じであること、ないしはほぼ同じであることについても盲目、ということになるか。このようなことを私は言いたくない。——形が同じであることを認知できない人を、我々は「盲目」と呼ばず「精神薄弱」と呼ぶことであろう。

781. アスペクト盲人はアスペクト A<sup>3)</sup>の交代を見ないことになる。しかし彼は、その二重

十字が一つの黒い十字を含んでいることも認知しないことになるのか。それ故彼は「ここにある図形の中で黒い十字を含むものを示せ」という課題を果せないことになるであろうか。そんなことはない。ただ、「今、白い地の上に黒い十字がある！」などと彼は言わないはずである。

782. 誰々は「画家の眼」、「音楽家の耳」を持つ、という言い方がある。しかし、これを持たない人の欠陥は、盲や聾の類の欠陥とは、ほとんど似ていない。


783. 誰々は「音楽的聴覚」を持たない、という言い方がある。そして「アスペクト盲」は（あるいは）この種の聴覚の欠如と比較すべきである。

784. 「アスペクト盲」の概念が重要なのは、アスペクトを見ることと一つの語の意味を体験することが類縁であることにある。というのも我々は「語の意味を体験しない人には何が欠けているか」<sup>4)</sup>を問いたいからである。——例えば、Bank という語をそれだけ孤立してある時はこの意味で、またある時は別の意味で発音できない人にとって、あるいはまた、その単語を十回も続けて発音している内にその語がいわば意味を失って単なる響きとなることを感じない人にとって。

## 2 「アスペクト盲」とは何か（続き）

このテキスト、及びそれに対応する『探究』の論述等から、「アスペクト盲」の能力について、次の論点がとりあえず導き出される。

① アスペクト盲人にはある種の能力が欠如していることを示すため「盲」という表現が用いられているが、この表現は誤解を招きやすい。彼は視覚や聴覚を欠いているという意味での盲や聾ではなく、また精神薄弱でもない。絶対音感の欠如<sup>5)</sup>や色盲との比較も不適切である。彼は標準的な視覚（聴覚）検査に合格し、それに応じた課題を果すことができる。ウィトゲンシュタインはアスペクト盲をむしろ画家の眼、音楽家の耳の欠如と比較するのがふさわしいと考えている。

② アスペクト盲人はネッカーの六角形  の一つの頂点が手前に突き出た状態から引っこんだ状態に一転することを経験しない。しかしこの図形が立方体を表していることは承知している。「これは何の図か」あるいは「これは何の記号か」と尋ねると「立方体」と答えるであろう。

③ 彼は白と黒の二重十字の地と図が互いに反転するのを見ることがない。しかしこの図形が一つの白い十字と一つの黒い十字を含んでいることを承知している。また、これに応じた課題を果すことができる。

④ 二つの顔が同じ顔である場合、彼はそのことを認知できる。それ故「これと同じよう

に見えるものを持ってこい」という類の命令（『探究』p. 213h）を遂行できる。例えば、焼き増した数多くの写真を同じもののコピー同士に分類・整理したり、割れた食器類の補充ができるであろう。この意味で、彼は精神薄弱ではない。

しかし、次のような疑問が直ちに提起されるであろう。アスペクト盲人が二つの顔を同じであると認める「同じ」の限界はどこにあるのか。また、反転図形を彼らはどのように見るであろうか。

ところで、検討にあたってまず留意すべきことは、アスペクト盲人の中には子供もいれば大人もいる、初心者もいれば熟達者もいる、そして我々が時に（あるいはしばしば）間違えるように、彼等も間違える、ということである。また、アスペクト盲にも様々な種類・程度がありうることである。


実は、第一の問が最終的な難問になる、と筆者は考える。アスペクト盲人といえどもカメラ屋の店員、料亭の洗場が勤まることは既に述べた通りである。この意味で、彼は二つの顔が同じであることを認知できる。しかし、「ほぼ同じ」「似ている」という場面に移ると問題はたちまち難しくなる。

例えば、彼はモンタージュ写真を手にして犯人を探す刑事には向かないであろうか。数多くの写真の中から同一人物の、ただし撮影時の年令、季節、場所、服装、髪形、表情などが様々な写真を、当の同一人物を写したものととしてよりわけられるだろうか。彼は二人の兄弟を前にして顔が似ていることに気づかないであろうか。また、東洋人の数多くの写真を前にして、これは日本人、これは中国人、朝鮮人、という具合に、どっちつかずという分類をも含めて、ある範囲で分類できないであろうか。「同じ」「類似」という表現も、このように種々の場面で用いられるのである。アスペクト盲でない我々といえども、刑事の適性以下の課題のそれぞれに対して、極めて適任の人間から極めて不適任の人間まで、実に様々であることは明らかであろう。

この事情を考えれば『最終草稿 I』780節を推敲した『探究』p. 213hで「彼は二つの顔が似ていることに盲目ということになるか。しかしそうすると二つの顔が同じであること、ないしはほぼ同じであることについても盲目、ということになるか。」という問に対する答が、「このことについて私は決めたくない」と書き改められたのも、ごく自然と思えてくる。

しかし、ウィトゲンシュタインがここで決着をつけなかったのは、「同じ」「類似」という語の用法の多様性、といういわば一般的な事情による、とは私は考えない。私見によれば、彼はここでディレンマに直面している。本論文の最後でこの問題を扱うが、そのためには「アスペクト」「として見る」概念の全容を概観せねばならないのである。

第二の問、即ち、図形の反転を経験しないアスペクト盲人に反転図形はどう見えるのか、

という問はどうか。彼には立方体の図形の一つの頂点が飛び出して見えることも引こんで見えることもないが、彼はその図形を立方体として認知できる。二重十字の白い十字、黒い十字のいずれかが浮き上って見えることはないが、二つの十字がその図形に含まれていることを承知している。さらに、うさぎもあひるも知っているという前提の下ではあるが、ヤストローのうさぎ-あひる-頭  がうさぎの頭でもあり、あひるの頭でもあることを承知しているのである。

しかもアスペクト盲人の認知は「視覚的」である。即ち、この認知のために彼等は眼を開いて視線を対象に向けねばならず、対象は適切な照明の下になければならない。それ故、アスペクト盲人もある意味で「見ている」のである。




我々は一度には反転図形の一つのアスペクトしか見ることができない。しかるに、アスペクト盲人には、もとより子供や無教養な者共を除外した彼等の熟達者にとっては、反転図形の複数のアスペクトが同時に見えることになりかねない。これでは、彼等は「盲人」どころか「超能力者」であろう。そのようなことが一体可能であろうか。

### 3. 一つのアスペクトの下で見ることの「生理学的基準」

アスペクト盲人といえども反転図形の複数のアスペクトを同時に見ることは不可能である、と考える人は生理学に訴えて不可能性を立証しようとするかもしれない。『最終草稿Ⅰ』777節<sup>6)</sup> がそのような可能性の一つを描写している。論点を要約すると、③～⑤の仮定、即ち

- ③ 我々が見る図形のそれぞれに応じて、我々の視線はそれに特有な軌道に沿って対象をなぞる。
- ④ この軌道と眼球運動のパターンとは対応関係がある。
- ⑤ 視線の軌道、眼球運動が一つのパターンからもう一つのパターンへと急転することがあり、二つのパターンがある間隔をおいて交互に出現することがある。
- ⑥ ある眼球運動のパターンは生理学的に不可能である。

という仮定のいずれもが実証され、しかも

- ⑦ ③におけるパターンの急転・交代と二重十字の地と図の逆転が対応する。
- ⑧ ヤストローのうさぎ-あひる-頭を、あひるの頭と、その背後で丁度重なったうさぎの頭として見るような眼球運動は不可能である。
- ⑨ 立方体の図形  を二つの立方体、即ち  と  が、互いに喰いこんだものとして見る眼球運動も不可能である。

ということが実証されたとする。

④～⑨から我々は「見る」ことに対する生理学的基準を得ることになり、アスペクトの反転とは何であるか、また、反転図形の複数のアスペクトが同時に見えることがないのは何故か、の説明も与えられる。

さらに、アスペクト盲人と我々との間に生理学的な差異がないとすれば、如何に彼等が「同時に二つのアスペクトを見る」と言い立てようとも、そんなことはありえない。また、彼等が実はどのアスペクトで見ているか、いつアスペクトが交代しているか、彼等の報告如何に関係なく、我々が決定できるのである。これが「生理学的基準」に訴える論者の夢想である。

もとよりウィトゲンシュタインは「生理学的基準」の導入に賛成しない。このような基準の導入は、我々の古い問題をおおい隠すことはできても、解決することはできない、——こう彼は述べている。「我々の古い問題」が何であるかについては、『探究』p.193efg（『最終草稿Ⅰ』433～5節）が適切に言いあてている。そこでは「アスペクトに気付く、アスペクトの閃き」という経験がとりあげられているが、ウィトゲンシュタインによるならば、その経験の原因は心理学者の関心事であり、当の経験概念、そして経験諸概念の中でのその位置こそが、彼自身の関心事なのである。

問題点を明らかにするために、ここではアスペクト盲人からの反論を想定してみよう。

#### 4. 「生理学的基準」に対するアスペクト盲人の反論

我々が想定するアスペクト盲社会からやってきた大学教授は、例えば次のように反論するであろう。即ち

立方体の図のその頂点が飛び出しているか引っこんでいるか、という問には答えられない。その図だけからは決まらないからだ。もっと適切な投影図がもう一枚あれば決定できるだろうし、前後の脈絡がより詳しくわかれば高度の蓋然性を持った推測も可能だろう。しかしその図一枚では明らかに情報不足である。

君達は、情報不足の故に未決定のままにすることに耐えられず、無理やり決断をして選択する。飛び出ているか引っこんでいるか、そのいずれかに決定する理由のないところでの、恣意的な選択であるのに、君達はそれを「頂点が飛び出して見える」と称し「見え」のせいにする。これは自己欺瞞ではないだろうか。

しかも君達の選択は理由のないものだったから、一度選択した後も、君達の決断は次々と動揺していく。その動揺を君達は「アスペクトが次々と交代する」と称しているのだ。

生理学的基準の発見だって。理由のないところでの決断やその後の変更に対応する生理学的過程はあるかもしれないしないかもしれない。存在したとしても、それは君達の自己欺瞞と動揺を隠すための、無花果の葉にすぎないであろう。……


彼はこのように述べるであろう。また、ヤストローのうさぎ-あひる-頭については、

もしその図が他のうさぎに囲まれた絵の中にあればうさぎである。多くのあひると共に描かれていればあひるの頭である。そのいずれともほど遠く、一つだけ孤立して描かれていれば、そのいずれでもなく、またそのいずれでもありうる。それなのに君達は「今うさぎに見える」「今はあひるだ」と大騒ぎをする。この大騒ぎが一体どれだけの意味を持つのだろうか。

この反論は筋が通ってはいないだろうか。彼我の相違はどこにあり、どちらが正しいのか。

ウィトゲンシュタインの解答は、冒頭のテキストが示すように「アспект盲人」の絵に対する関わり方は我々の場合とは一般に異っている」というものであった。我々が絵をいわば実物同様に見るのに対し、彼等は絵を「青写真」（『心理学の哲学Ⅱ』479節）のように読む。しかも態度の相違は単なる意見の相違ではなく、生活における絵の役割の相違である。（『最終草稿Ⅰ』650節、『探究』p.205c参照）

生活のいくつかの場面での彼我の相違についてウィトゲンシュタインが述べているもののうち、とりあえず画法幾何学の例（『最終草稿Ⅰ』633節、『探究』p.203a）について触れておきたい。

という図形を、凸形の階段の床板と腰板の中心点を直線  $a$  が結んだもの、として見ることは「アспект盲」にとっては不可能であろう。彼はこの図形を指示通りに読むことを学ばねばならない。その労苦はどれほどであろうか。あるいは、「見せかけの建造物」（Scheinarchitektur）、例えばエッシャーの『望楼』のような三次元としては不可能な絵を、多次元的に可能なものを表わしたものとして我々が読み解こうとする努力であろうか。

この図形を立体的に見ることが出来ない人は画法幾何学の証明を辿ることが困難であろう、とウィトゲンシュタインは述べている。一般的には、これは正しいと思われる。アспект盲社会で幾何学が成長した場合、それは画法幾何学という形はとらなかったであろう。しかしこのことによって、一部のアспект盲人が画法幾何学の図形を見て、これを化学の立体模型のような立体幾何学、あるいは解析幾何学へと頭の中で翻訳できる、という可能性が否定される訳でもない。即ち、このような熟達者は、我々の中のある人々、即ち、証明を辿っているうちに階段の凹凸が反転してしまい、もう一度初めから考え直さなければならない



人々、よりは、邪魔が入らない分だけ、有利な立場にある、と言えよう。我々はその図形を一つのアスペクトの下で見て証明を辿ることができるが、他方意志の力でアスペクトの反転を抑止せねばならないからである。

アスペクト盲に関するこれまでの議論は、テキストでの例示を頼りに進められてきた。しかし、「あるものをあるものとして見る」ことの出来ない人間がアスペクト盲と呼ばれることになる「として見る」概念を、その全般に亘って論じてきてはいない。これが次の問題である。

## 5. 「として見る」概念の家族的類似性。「アスペクトの交代」の位置

他の多くの概念と同様に、「アスペクト」「として見る」という概念も、ウィトゲンシュタインが強調する家族的類似性を備えている。「アスペクト」「として見る」という語句の用いられ方は一様ではないが、しかし同音異義でもない。それ故「アスペクト」の一つの例にあてはまる話から普遍的な結論が得られることは必ずしも保証されていない。当の事例がアスペクト概念のどのあたりに位置するかを考慮してみなければならないのである。これを失念すると我々は「たった一種類の例で自らの思想を養う哲学の病気」（『探究Ⅰ』593節）に感染する。念のために、家族的類似性の強調を引用によって確認しておきたい。

アスペクトの体験に共通しているものといえば、次のような表現の形式である。即ち、「今私はそれをこれとして見る」、「今私はそれをこのように見る」、「それは今はこれであり、——今はこれである」、「私はそれを今は……として聞く、以前は……として聞いていた」等。しかしこれらの「これ」や「このように」の説明は事例が異なるに依じて全く種類を異にするのである。（『最終草稿Ⅰ』697節。なお『最終草稿Ⅰ』588節も参照）

主に思想や連想によって規定されているアスペクトもあれば、他方、「純粹に視覚的で」、ほとんど残像のように、自動的に現われそして交代するアスペクトもあるのだ、——こう私は言いたい。（『心理学の哲学Ⅰ』970節）

他方、家族的類似性を示すアスペクト概念の内にも、ある種の順序・秩序が存在する。「アスペクトの交代」という体験がアスペクト概念が成立する鍵となっているのである。

アスペクトの交代がなかったなら、このように、あるいは、あのように解すること（Auffassung）があるだけで、このように、あるいはあのように見るということはなかったであろう。（『心理学の哲学Ⅱ』436節）

アスペクトの交代を感じない人は、「今それは全く違って見える！」とか「その絵はまるで変ってしまったかのようだ、でも変ってはいないのだから！」とか「形は同じままだが、それでも何かが変っている、つまり、私が解し方と呼びたいもの、何を見たかが変わったのだ！」などと言おうとはしないだろう。（『心理学の哲学Ⅱ』39節）<sup>9)</sup>

それ故アスペクトの交代を感じない人は、アスペクト概念を欠いたアスペクト盲となるのである。

「アスペクトの交代」という体験が鍵となっていることは、「アスペクト」という語の意味に戻って考えてみれば、むしろ当然と思われる。同じものの様々な局面がアスペクトだからである。見られるものは変ってはいない、しかしある意味では変っている、という一見矛盾した体験、これを表現する言葉が「アスペクト」であり「として見る」なのである。即ち、

アスペクトの交代の表現は、知覚が変化していないことの表現を同時に伴った、新しい知覚の表現である。（『最終草稿Ⅰ』494節,『探究』p.196b）<sup>8)</sup>

## 6. 「アスペクト」概念のさまざまなアスペクトについて


家族的類似性を備えたアスペクト概念は多様であり、また「交代するアスペクトの記述の仕方は、それぞれの場合に応じて異った種類のものであることを、よく考えなければならない。」（『最終草稿Ⅰ』694節,『探究』p.207d）と言われるからには、我々もまた、それぞれの異同について考慮しなければならない。『最終草稿Ⅰ』694-705節からとりあえずいくつかの特徴を抜き出せば、次のようになる。

- ① 交代するアスペクトの記述といえども千差万別である（694）。
- ② 表象力（Vorstellungskraft）を必要とするアスペクトより必要としないアスペクトの方が、より基本的と思われる（698,699）。
- ③ 予備知識の要・不要でも相違がある。うさぎのアスペクトとあひるのアスペクトを見るためには二つの動物を知らねばならないが、二重十字のアスペクトについてはこのような制約はない（700,702）。
- ④ 立体的なアスペクトも一様ではない。立方体や階段の立体性と比較すれば、二重十字の二つのアスペクトは本質的に立体的ではない（705）。
- ⑤ 二重十字、階段、うさぎ-あひる-頭等のアスペクトに対して、転倒した物体としての三角形、平行四辺形の半分としての三角形のアスペクトは異った関係にある。三角形のこれらのアスペクトを見るためには表象力を必要とする（695,698,703）。

しかも、アスペクトの交代の経験がアスペクト概念の成立の鍵となるとはいえ、ひとたびアスペクト概念が成立した上は、全てのアスペクトが必ずしも交代を要する訳ではない。『最終草稿Ⅰ』602節（『探究』p. 201c）では、

アスペクトの交代における諸アスペクトは、その図形が場合によっては一つの絵の中で不変にそのアスペクトを保持しうるようなアスペクトである。

と言われ、『最終草稿Ⅰ』605節（『探究』p. 200c）がその具体例となっている。即ち

さて、例として三角形のさまざまなアスペクトを考察しよう。人はこの三角形  を、三角の穴として、物体として、底辺の上に立つ幾何学的図形として、頂点でぶら下げられた幾何学的図形として、山として、くさびとして、矢ないし指針として、（例えば）元来は左斜辺を底とする物体が転倒したものとして、平行四辺形の半分として、その他諸々のものとして見ることができる。<sup>9)</sup>

この図形が三角形である、という一点は確かに押えられており、同じものを違った具合に見る、という図式から外れていない。他方、一つのアスペクトの下で見えている場合、アスペクトの交代は生じないのである。

その上、次のような未知の記号について種々の、互いに矛盾する脈絡を創作し、その創作の下で記号を見ることも「として見る」に数えられるのである。即ち

ある任意の文字記号——例えば 𐀀 について私は、それはどこかの外国語のアルファベットの厳密に正しく書かれた文字である、と想像できる。しかしまた、その文字の書き方には欠点がある、しかも複数の異なった欠点のあり方の中の一つである、と想像できる。例えば、ぞんざいに書かれたもの、子供の典型的な稚拙な書き方、公式文書の装飾風などでありうる。正しい書き方からのずれ方も様々でありうるのだ。——そして私がその記号をそれで取り巻く創作に応じて、私はその記号を様々なアスペクトで見ることができる。——この点で一つの孤立した語の意味の体験と密接な類縁関係が存在する。（『最終草稿Ⅰ』706節、『探究』p. 201d）

「アスペクト」という概念はこれだけの幅を持って用いられている。この幅の故に、次のような場合が当然予想される。即ち

ある人はうさぎーあひるー頭をうさぎの絵とみなすことができ、二重十字を黒い十字の絵とみなすことができるが、一つだけボツンとある三角形の図を、転倒したものの絵とみなすことができない。三角形のアスペクトを見るためには表象力が必要である。（『最終草稿Ⅰ』703節、『探究』p.207j）

三角形を転倒した物体として見る表象力を欠いている人は、この故にアスペクト盲と判定されるべきであろうか。家族的類似性をもつ「アスペクト」概念のどのアスペクトで「アスペクト盲」が考えられているのか。誰がアスペクト盲なのか。

## 7. 誰がアスペクト盲なのか。アスペクト盲は何が出来ないか

ウィトゲンシュタイン自身は「アスペクト」という語の様々な用いられ方に応じてアスペクト盲の吟味を行っていない。さらに、アスペクト盲も一種類とは限らない。しかし、ここで可能なケースを場合分けし、それぞれについて「アスペクト盲」と言えるか否か、また解答を求める中でどのような問題が生じてくるかを、ウィトゲンシュタインにならって推測してみたい。とりあえず、次の5つの問を検討する。

- ① 立方体の図、階段、二重十字のようなアスペクトの交代に気づかぬ人は、アスペクト盲か。
- ② あひるを知らないので、ヤストローのうさぎーあひるー頭を見ても、アスペクトが交代しない人はアスペクト盲か。
- ③ ①～②の交代には気づくが、三角形をさまざまなアスペクトで見ることが出来ない人は、アスペクト盲か。
- ④ 未知の記号  $\text{9l}$  について、これを文字と考え、しかもその筆法について様々な脈絡を創作し、その創作に応じた筆法で見ることが出来ない人は、アスペクト盲か。
- ⑤ 木の梢に人の顔が隠されている判じ絵を眺めていて、ある瞬間に、枝ではなく人の顔だと気づいて、判じ絵が解ける、という体験を持たない人は、アスペクト盲か。

以下は解答の素案である。

- ①がアスペクト盲の典型であることは本論文冒頭のテキストから明らかである。
- ②について。あひるを知らないが故にヤストローのうさぎーあひるー頭が反転しない場合、これはアスペクト盲と認定する理由にはならない。しかし、あひるとうさぎの両方を知っていても、アスペクトの交代を経験しない人は、アスペクト盲である。

他方、アスペクト盲人といえども、ヤストローの絵に対して何の反応も出来ない、ということにはならない。例えば、この絵を見せられ「この動物をつれてこい」と言われて、彼が

あひるかうさぎ、あるいはその両方をつれてくることは、ありうる話である。ところが彼があひるをつれてくることは、彼がその絵をうさぎとしてではなくあひるとして見たことの証拠にはならない。何かが出来ることはそのものとして見ていることを必ずしも含意しない。彼はその絵を複数の動物の記号として承知しており、とりあえず該当する一羽をつれてくる、ということがありうるからである。既に述べたように、絵に対する彼の態度は、我々と異っているのである。

ところで、この彼我の差の話は、一見そう思われるほど奇異ではない。ウィトゲンシュタイン自身、彼我の差を文化の差に帰着させうるような、次のような可能性を示唆している。即ち

人々の絵に対する関係が我々の場合とは全く異っていることがありうる、ということは考えられる話であり、われわれにとっても重要である。

それ故、彩られた顔だけを顔として見るが、一つの円と四つの点から出来ているものは顔とは見ない、という人が想像可能である。それ故、うさぎ—あひるの絵を動物の頭の絵として見ることはなく、従って我々が知っているアスペクトの交代をも見ることもない人が想像可能である。（『心理学の哲学Ⅱ』481-2節）

③はアスペクトの反転が問題となっていないケースである。

さて、平行四辺形を知らない人は三角形を平行四辺形の半分として見る事が出来ないが、これが彼をアスペクト盲と判定する理由にならないことは、②で述べた通りである。また、三角形を転倒した物体として見る事の出来ない人は、①と②のアスペクト盲の交代があるという意味では、アスペクト盲ではない。この人には表象力が欠けている訳だが、どのような表象力をどの程度必要とするかは、事例に応じて千差万別である。ウィトゲンシュタインは、一定のことを出来ることが「として見る」という体験の前提となっている事例、いいかえれば、たとえ本人が「として見ている」と主張しても、彼が一定のことを出来ないならばその主張が認められない、という事例を考察している（『心理学の哲学Ⅱ』483-6節、『探究』p.208g-209c）。次のような話である。

幾何学で「頂点」「底辺」という語を習得したばかりの初心者は「今私はこれを頂点として、これを底辺として見る、今度はそれを頂点、それを底辺として見る」と言うことは出来ない。彼は紙をその都度回転させてはじめて、頂点と底辺がわかるであろう。この言葉が自分の言葉として言える人は、例えば、紙を回転させることなく各点から縦横無尽に「垂線を下し」て、証明が遂行できねばならないのである。

これは、ある技術の習得が当の体験の前提条件となっていることを意味し、技術の習得な

ど前提しない「歯の痛み」のような体験と比較すれば、奇異に感じられるかもしれない。ウィトゲンシュタインによれば、二つの体験概念は類縁ではあるが同一ではない。今の事例では「見る」という概念が変様をうけているのである。

問題は、体験概念、「見る」という概念の変様・拡張が今の事例でどの程度自然で無理のないものであるか否かである。体験内容に訴えて議論する訳にはいかない。今の事例はアスペクトに関する数多くのものの中でも「概念的なものが支配的で、アスペクト体験を表現しようとするれば概念的説明による他はない場合」(『最終草稿Ⅰ』582節参照)の典型だからである。そこで、次の点を指摘しておきたい。

第一に、「として見る」と言えるためには一定のことが出来なければならぬ、という指摘には自然なところがある。これは「見る」についても指摘できる。自分に向かって突進してくる自動車をさけようともせず平然としている人が、「その自動車が自分には見えている」と言おうと、我々はそのことをまず認めないであろう。少くとも見ているのに車を避けない理由が示されてはじめて、彼に見えていることを認めるであろう。

次に、三角形を様々なアスペクトで見るために必要な表象力は、その図形をとりまく脈絡を考え出せることにあり、例えば、三角形の図にスケッチを加えることによって一枚の絵に仕上げるのが表象力の一つの表現となる、と言えよう。しかし他方、何を「として見る」と呼び何をもはやそう呼ばないかについて自然な限界が存在すると思われる。例えば一本の線分——の上に三角形を作ることは可能ではあるが、このことを理由に「私はこの線を三角形の一辺として見る」とか「私はこの線を転倒した物体の斜面として見る」などとは、とても言えないことであろう。

もう一例をとれば(『心理学の哲学Ⅱ』492節、『探究』p.208cを参照)、立方体の図を箱として見ることはできても、ブリキの箱として、あるいは紙箱として見ることは、材質感のない図では困難である。ブリキの箱と紙箱のアスペクトの交代の体験などは、想像不可能である。

つまり、脈絡が想像できるからといって、「として見る」ことになるとは限らない。しかし「三角形の頂点(底辺)として見る」の事例は、「として見る」の自然な適用の限界内に収まっている、と思えるのである。

三角形を転倒した物体として見ることの出来ない人の話に戻ろう。転倒した物体として見ることが出来るようになるための一つの訓練法として、ウィトゲンシュタインは次のようにもう一つの三角形を付け加えることを提案している(『心理学の哲学Ⅱ』487節)。<sup>54</sup>今日の我々ならビデオの動画と静止画像も利用するところであろう。このような訓練法は多くの人にとって効果的であろうが、全く効果がなく、ますます混乱するだけの人もいよう。訓練効果のない人は、①と②に関してアスペクトの交代を体験しても、やはり「アス

ペクト盲」と判定すべきであろうか。

私にはそうは思えない。この人は、むしろ別の種類の「愚鈍」なのである。

①と②に関してアスペクト盲と判定された人は、③の課題も当然果すことができないであろうか。アスペクト盲人の中には「鋭敏」な者も「愚鈍」な者もいることを思いおこすべきである。鋭敏なアスペクト盲人は、図面を回転することなく頂点から垂線を下すことができ、「この転倒した物体」という語句を含む文を苦もなく理解できるであろう。既に述べたように、アスペクトにおいて概念的なものが支配的であればあるほど、体験の表現は概念的説明の形をとらざるをえない。そのような事例は、アスペクト盲の判定には不適当なのである。

④について。未知の文字に対して複数の、しかも互いに矛盾する脈絡を創作し、その創作に応じて「として見る」ことが求められている。「アスペクト」「として見る」という概念が、③における「三角形の頂点と底辺」の事例よりも、なお一層の変容をうけていることは明らかである。問われているのは主として創作能力であり、今の事例はアスペクト盲の判定に不適当なのである。<sup>10)</sup>

⑤の判じ絵の例は、「アスペクト盲」の想定の一歩を踏み出す発端となる、と考えられる。節を改めて検討したい。

## 8. 「アスペクト盲」想定の一歩

①、②の交代するアスペクトと判じ絵との相違は、判じ絵のアスペクトがいわば「浮び上ってくる」ことである。以前は枝に見えていたものが、判じ絵を解いた後では人の顔となり、もはや元に戻ることがない。(尤も、翌日になると忘れてしまい、再び初めから判じ絵を解かねばならない場合もある。)(『心理学の哲学Ⅱ』305節参照)

判じ絵の解決の前後の相違は何か。この相違を「厳密なコピー」は示すことができない。(『最終草稿Ⅰ』439節、『探究』p.196c)むしろ大よそのスケッチに相違が表わされるのであって、前者には森が、後者には木の梢の人間が描かれるのである。大よそのスケッチゆえ、細部では不正確な点や誤りがあるにせよ、今問題としているポイントでは誤りえない。(『心理学の哲学Ⅱ』361節、『最終草稿Ⅰ』647節、『探究』p.203i-204aを参照)線描のポイントは何が最初に眼に飛びこんだかにあるのである。(『最終草稿Ⅰ』659節、『探究』p.204bを参照)

『心理学の哲学Ⅰ』1023節では、ウィットゲンシュタインはケーラーを引き合いに出して、色や形のみならず「物」や「背景」も視覚的概念である、という語り方を導入している。この語り方に従えば、アスペクト盲人は色と形は認めるが地と図の区別のない人、ということになる。「これと合同ないし相似の図形を探せ」という課題を彼が遂行できることは既に述

べた通りである。そして今、判じ絵が課題である。

立方体の図式、凹凸の階段、二重十字といったいわば幾何学的図形、さらにはヤストローのうさぎーあひるー頭の場合、形を決定している輪郭線に曖昧なところはない。しかし判じ絵の場合は、何が輪郭線であるかを定めるところからはじめなければならない。色に頼りきる訳にもいかない。色が輪郭を与えるとは限らないからである。

地と図の相違、判じ絵解決の前後の相違はどこに表われるか。その一つは、どの順序でスケッチするか、どこにフレーズを置くかである。この相違は、線描や色付けがテレビのブラウン管上の各点の色を定めるような点描法による場合には決して表われない相違なのである。

アスペクト盲人は判じ絵を解くことが不可能だろうか。アスペクト盲が一種類とは限らないので、一連の問を考えてみよう。

彼は絵に何が描かれているかを答えられないだろうか。(例、「木」「馬」「人」。)人は何人描かれているかわからないだろうか。(「2人」「3人」と言えないだろうか。)  
「2人」と答えた場合、「木の梢にもう一人いる、探せ」という命令に対して、「見つけた、これだ」と答えることはありえないだろうか。たとえ自分では発見できなくても隠れた男の顔の輪郭を示されて、「なるほど」と言わないだろうか、そしてその後は「3人いる、これとこれとこれだ」と示せるようにならないだろうか。

これらの問とそれへの解答をウィットゲンシュタインは想定していない。しかし、初めの問から否定的に答えるとすれば、そのアスペクト盲人は絵の中の木や馬や人を認知できないことになり、完全に規格化された若干の記号は別として視覚的記号の使用が一般に不可能となるであろう。また、普通の人よりは知覚遅れの人に似てくるであろう。さらに、①～④を検討した折の諸前提とも齟齬が生じてくるであろう。

他方、彼が最後まで肯定的に答えるとすれば、彼我の差はなくなるであろう。しかもこれまでの論述と重ねると、アスペクト盲人にアスペクトの交代がないのは同時に複数のものが見えているせいだ、とされるであろう。まるで、うさぎの頭とあひるの頭の両方を同時に見ることができない我々の側に何かが欠けている、と思えてくるのである。

ウィットゲンシュタインがまず第一に想定したアスペクト盲は、現在の両極端の中間のどこかに位置する、と思われる。次の例をとりあげてみよう。

ここで私には美学の対象についての会話で次のような言葉が使われることが思い浮かんだ。即ち、「君はそれをこのように見なければならない、そう考えられているのだから。」  
「君がそれをこのように見るなら、どこが間違っているかわかるだろう。」  
「君はこの小節を導入部として聞かねばならない。」  
「君はこの調性に従って聴かねばならない。」  
「君はそれをこのようにフレーズ付けしなければならない。」  
(そしてこれは演奏にも聴くことにも



関係しうるのである。)(『探究』p.202k)

とりあえず観賞に話を限ってみても、見られるもの、聴かれるものが変わった訳ではない。しかし変って見え、違って聞こえるのである。これがアスペクト的体験であることは明らかであろう。アスペクト盲はこのようなフレーズ付けが不可能な人間と想定されていたことは確実である。

①から④までの話は、絵や図形を例にとり進められてきた。その限り、アスペクト盲を、視力やその他の視覚障害は皆無で、ただ絵や図形に対する態度が我々とは異っている人間、として理解することが可能であった。しかし⑤の判じ絵となると事情が異ってくる。

これは実物の世界でもよくある例である。即ち、木を隈なく眺めているが首だけを出している人間になかなか気付かない場合、青緑の葉っぱの上の雨蛙に気付く場合、雑踏の一方向をかなりの時間眺めた後でそこに友人をふと見つける場合、——このような場合に合致する話なのである。さらに、眼の前に坐っている人が永年会わなかった知人であることに気付く場合もこれに付け加えてよいであろう。

アスペクト盲人はこの種の発見が実物について不可能であろうか。そうは思えない。不可能とすると、実生活での多くの基本的なことが彼には出来なくなるからである。他方、発見が可能とすると、彼はある種のフレーズ付けが出来ることになる。「アスペクト盲」という想定自体が、果して首尾一貫しているであろうか。

彼は二つの顔が似ていることに盲目ということになるか。——しかしそうすると二つの顔が同じであること、ないしはほぼ同じであることについても盲目、ということになるか。このことについて私は決めたくない。(『探究』p.213h. 傍点引用者)

ウィトゲンシュタインはここで立ち止った、と言ってよいであろう。「アスペクト盲」という想定が実は首尾一貫させられない、ということはありえない話ではない。しかし仮にそうとしても、無用の想定、全くの誤りとなる訳でもない。何故なら

見られたものの描出、ならびにコピーという概念は非常に伸びがあり (dehnbar)、そしてこれと共に見られたものという概念も伸びがある。(『最終草稿 I』446節, 『探究』p.198d)

と言えるからである。「見る」「見られたもの」という概念は一樣で単純で見通しが効く、といったものではない。「アスペクト盲」の想定が首尾一貫しない様相を呈するとしても、そ

れは本来の「見る」という概念のこのような性格の反映である、というのは十分ありうる話なのである。

〔注〕

1) この論文は「感覚と知覚 1 日常言語分析的アプローチ——いわゆるウィトゲンシュタインの「アスペクトの知覚」をめぐる——(新岩波講座哲学9『身体 感覚 精神』1986年 92-116頁)で問が残した問題の一つを扱う、いわばその続編である。参照して頂ければ幸である。

なお、ウィトゲンシュタインの文献は以下の通りである。

『哲学探究』(『探究』と略す) = Philosophical Investigations, Blackwell, 2nd. Ed., 1958)


『心理学の哲学に関する覚え書き 第1巻』(『心理学の哲学Ⅰ』と略す) = Remarks on the Philosophy of Psychology Volume I, Blackwell, 1980)

『心理学の哲学に関する覚え書き 第2巻』(『心理学の哲学Ⅱ』と略す) = Remarks on the Philosophy of Psychology Volume II, Blackwell, 1980)

『心理学の哲学に関する最終草稿 第1巻』(『最終草稿Ⅰ』と略す) = Last writings on the Philosophy of Psychology Volume I, Blackwell, 1982)

節番号で引用・参照箇所を指示するが、『探究Ⅱ』についてはBlackwell版のページ、パラグラフで指示する。例えばp.214d は214ページ第4パラグラフである。なお、パラグラフは前ページから続いているパラグラフも数え、なお改行の度に数えることにする。

2) なお、現在公刊されている著作の中で、これらの箇所以外に「アスペクト盲」という表現自身が登場するのは、私の知る限り『心理学の哲学Ⅱ』478,479節のみである。

3) それぞれが互いに地となり、図となる二重十字  の二つのアスペクト。

4) 「意味盲」の問題である。この問題は「アスペクト盲」と平行して考えられている。むしろ、この時期の著述から見る限り、時期的には「意味盲」の問題が初めに考えられ、そのうちに、アスペクトについても同じことがあるとすればどうか、という問が生じた、と解すべきであろう。「意味盲」という表現自身は『最終草稿Ⅰ』にもはや登場せず、『探究Ⅱ』にも登場しない。しかしこの問題がアスペクト盲との関連で依然として意識されていたことは、p.210dやp.214fから明らかである。



アスペクト盲の問題と意味盲の問題とは「概念的な類縁関係」があるが、両者は同一ではない。(『心理学の哲学Ⅰ』1064節参照) 検討を進めるにあたって、どこまで類比的な議論が出来、どこで出来なくなるかに注意すべきなのである。例えば、「アスペクトの交代の体験」をウィトゲンシュタインは疑わなかったが、「意味の体験」は想像の産物にすぎないのではないか、という疑念が表明されている箇所(『心理学の哲学Ⅰ』355節)もあり、果して体験と呼べるかどうか、体験と呼べるのはどういう意味でか、といった問題がつきまとっているのである。

意味盲についてはこの論文では立ち入らず、他日を期すことにするが、一体何が問題なのかについて、私の見当を述べておきたい。

問題は単一の問題というよりも、むしろ一つながりのものであるが、次のような話が発端となりうる。即ち、ある人が私にドイツ語で「Bankのところまで待て」と言ったとする。(Bankはドイツ語では「銀行」と「ベンチ」の意味がある。) 私は銀行のところで彼を待ち、待ち合せは失敗する。後で私は「あの時自分はBankという語を銀行の意味で聞いたのだ」と言う。(念のために言えば、BankとTankを聞き違える類の聞きまちがいは今の問題とは無関係である。)

私にとっては自然なこの話に対して、次のように反論する人（意味盲）がいたらどうか。即ち、「Bankという語を銀行の意味で聞く」とか「Bankという語をベンチの意味で聞く」などということはありません。第一、意味の担い手は文章全体、さらには文脈である。文脈や文から切り離せば、語は意味を失ってしまう。君の友人は「Geldbankのところで待て」とも「Sitzbankのところで待て」とも言っていない。「Bankのところで待て」と言ったのだ。君達のまちがいは「意味のとり違え」ではなく「情報不足による不定」と言うべきだ、と。

意味盲と我々との様々な相違の検討がここからはじまる。多義的な一語文の場合ならどうか、孤立して一語を発する時意味盲にとってその語は意味を欠いた符号にすぎないのか、意味盲は同一の文を異った表情をこめて読むことができないのか、他方我々にとって、どこで、どのような意味で「意味の体験」について語ることが可能か。これらが、「意味盲」の問題として私が理解するものである。

- 5) 絶対音感を持ってもアスペクト盲でありうることについては『心理学の哲学Ⅰ』1034節を参照のこと。
- 6) この節は冒頭に引用したアスペクト盲に関するテキストの直前の節である。『探究』ではp.212dがこれにあたる。
- 7) さらに二節を挙げておく。「アスペクトの交代という現象を通してはじめて、アスペクトがそれ以外の見えから分離するようになる。」（『心理学の哲学Ⅰ』415節）「アスペクトが交代する場合にのみ、我々はアスペクトに気付くことになる。」（『心理学の哲学Ⅰ』1034節）
- 8) とところで、単なる見誤り、例えば、縄を蛇に見誤った、といったことは「アスペクトの交代」ではない。命名の争いに墮することを避け、控え目に言えば、ウィトゲンシュタインが「アスペクト」として考えている問題ではない。時に見誤りを犯し、言い間違い、聞き間違い、計算間違いをする点では、我々もアスペクト盲人も変りがない。これらの間違いには理由のあることもあれば、理由が見当たらない場合もある。また、精神分析的なものをも含めて原因を探したくなるかもしれない（『最終草稿Ⅰ』787節、『探究』p.215d 参照）。しかし見誤りや感ちがいは、誤りを訂正すればそれまでのである。
- 9) また、これに関連して次のようにも言われている。「『それはまたこれでもありうる』というゲームは一体どのように行われるか。（当の図形がそれでもありうるところのそれ、そしてまた当の図形がそれとして見られをるところのもの、——これはもう一つの図形ということに尽きる訳ではない。『私は  を  として見る』と言う人は、なお非常に様々異なったことを意味 (meinen) しているかもしれないのである。」（『探究』p.206d）
- 10) ウィトゲンシュタインにとって④の例は「一つの孤立した語の意味の体験」の問題、「意味盲」の問題との関連で重要であった。このことと「アスペクト盲」の判定に不相当であることは矛盾しない。概念的説明の典型例が意味を述べることからである。アスペクト盲の問題と意味盲の問題は類縁ではあるが同一ではないことがここに示されている。

付記 この論文を準備中に野矢茂樹氏の「規則とアスペクト ——『哲学探究』第Ⅱ部からの展開 ——」（『北海道大学文学部紀要』36-2, 昭和63年3月）を読むことができた。かなりの点で氏とは見解を異にするが、氏の論文に接する機会に恵まれなかったら、現在の論文を書くことは不可能であったと思われる。記して氏に感謝する次第である。

## WAS KÖNNTEN DIE "ASPEKTBLINDEN" NICHT TUN?

Masahiro OKU

In diesem Aufsatz versuche ich die Abschnitte 778-784 von Ludwig Wittgensteins "Letzte Schriften über die Philosophie der Psychologie, Bd. I", und S. 213-214 (nach Blackwells Paginierung) von "Philosophische Untersuchungen" zu interpretieren. Diese Abschnitte behandeln die von Wittgenstein angenommenen "Aspektblinden", d. h. die Menschen, denen die Fähigkeit, etwas als etwas zu sehen, abginge.

Aus dem Text folgt es sogleich, daß der Aspektblinde so gut wie wir sehen, hören und erkennen könnte, nur daß er den Aspektwechsel nicht erleben könnte. Um ihm die Fähigkeit, zwei Aspekte zugleich zu sehen, zu verleugnen, möchte man sich auf physiologische Forschung verlassen, aber das geht nicht. (Siehe LS I §777) Sein Verhältnis zu Bildern würde ganz anders als unseres.

Dann ist es klargemacht, daß die Begriffe "Aspekt" und "Sehen als" ihren Ursprung in dem Erleben des Aspektwechsels haben, und daß sie jedoch den Charakter der Familienähnlichkeit haben. Viele Aspekte des Aspektbegriffs werden überschaut, und es kommt in Frage, auf welchen Aspekt hin man den Aspektblinden feststellen soll. Es stellt sich heraus, daß die Beispiele vom Dreiecke (LS I §605) und von einem fremden Buchstaben (LS I §706) für die Feststellung des Aspektblinden irrelevant sind. In diesem Sinne, zeigt es sich, ist das Problem der Aspektblindheit zwar verwandt, aber nicht identisch, mit dem der Bedeutungsblindheit.

Schließlich, scheint es mir, wäre die Forschung von der Aspektblindheit in eine Sackgasse geraten, aber dies ist nichts anders als das Resultat aus der Undurchsichtigkeit, Nichteinförmigkeit von den Begriffen "Sehen" und "Was gesehen wird" selbst.